

◆河内国

古代寺院と寺辺の景観……………	西田敏秀	247
——河内九頭神廃寺周辺の調査成果から——		
交野ヶ原の歴史地理——北河内の寺院を結ぶ——	上杉和央	263
生駒西麓の古代寺院の研究……………	網 伸也	279
——河内寺廃寺跡と法通寺跡を中心に——		
河内六寺と知識……………	安村俊史	297
河内九頭神廃寺……………	西田敏秀	311
百濟寺跡……………	大竹弘之	313
高宮廃寺跡……………	丸山香代	315
河内寺廃寺跡……………	仲林篤史	317
行基建立の四十九院と開発……………	近藤康司	321
山背の行基寺院——紀伊郡域を中心に——	吉野秋二	337
摂津国西成郡津守村の行基寺院……………	西本昌弘	349
おうせんだう廃寺・がんせんだう廃寺……………	堀 大輔	361
山崎廃寺(山崎院)……………	古閑正浩	363
大野寺跡(土塔)……………	近藤康司	365

◆地方寺院の諸相

地方寺院の法会——伽藍配置・仏像・経典——	三舟隆之	369
飛驒における軒瓦の一樣相……………	三好清超	383
古代若狭における寺院造営の一樣相……………	松葉竜司	399
——興道寺廃寺を中心に——		
伊丹廃寺跡……………	中畔明日香	415
海会寺跡……………	近藤康司	417

◆中国と朝鮮

中国における双塔伽藍の成立と展開……………	向井佑介	421
百濟寺院の立地——谷に造営された寺々——	清水昭博	441
新羅王京寺院の伽藍配置について……………	田中俊明	457
新羅下代景文王の宗廟祭祀と崇福寺……………	井上直樹	475

あとがき
寺院名索引
執筆者紹介

序

菱田哲郎
吉川真司

◆考古学からの古代寺院の解明

(1) 古代寺院調査の進展

日本の古代寺院についての研究は、官大寺に対する文献研究とは別に、各地に残る寺院跡が注目され、その探索が二〇世紀前半には活発におこなわれていた。瓦や礎石といった寺院特有の考古資料に着目することにより、寺院跡の探索が容易となり、またたくうちに多くの寺院跡を見いだすことができたのである。大正年間に史蹟勝地の調査が全国規模で開始するが、その際にも多くの古代寺院が取りあげられている。そして、金堂や塔などの基壇が土壇として残される場合、地表観察から寺院の伽藍配置を推測するといった初歩的な寺院調査がおこなわれるようになった。したがって、発掘調査の対象は、当然ながら寺院の中心施設に限られる傾向があるが、結果として伽藍配置の類別やその変遷についても多くの知見が得られるようになった。石田茂作らによる総合的な検討の¹⁾ように、古代寺院の実像が全国規模で描けるようになったのである。

その後、二〇世紀後半の寺院調査は、文化財保護委員会による四天王寺（一九五五・五六年）の発掘、奈良国立文化財研究所による飛鳥寺（一九五六・五七年）、川原寺（一九五七・五九年）の発掘のように、より組織的かつ大がかりで、考古学、建築史、文献史など諸学の協業がはかられた点特徴的である。調査成果を受けた整備も始まり、一九六五年に発掘調査がおこなわれ、翌年から翌々年にかけて整備がおこなわれた大阪府・百濟寺跡などは、その早い例としてあげられる。このように、寺院の調査はその史蹟整備とも不可分にかかわって進められることとなるが、とりわけ各国ごとに置かれた国分寺については、その調査・整備が急がれ、各地における寺院整備の嚆矢となっている。一九七〇・七一年に整備がおこなわれた鳥根県・出雲国分寺のほか、鳥取県・伯耆国分寺、兵庫県・播磨国分寺、岐阜県・美濃国分寺、長野県・信濃国分寺など、枚挙にいとまがない。いずれも塔や金堂、中門、回廊、講堂など、寺院の中心施設を示す点にあり、発掘調査もそのための伽藍配置の解明に中心があつた。

このような流れとやや異なる手法をとつたのが香川県・讃岐国分寺

である。寺院の中心域は四国八箇所⁽¹⁾の霊場の一つ國分寺があり、古代の國分寺跡の調査は、その周辺域を中心におこなわれた。その結果、講堂の北方において僧房跡が残り⁽²⁾のよい状態で発見され、國分寺の機能を考える重要な手がかりを与えることになった。この僧房跡は東西八メートル、南北一六メートルの基壇上に建ち、桁行二一間、梁間三間の建物で、桁行三間分で一房をなし、中央間を挟んで東西に三房ずつの計六房からなることが判明した。⁽²⁾ 房内の区画も明らかになり、一房に少なくとも四室の個室があり、二四名の僧侶を収容できることが判明する。これは諸國國分寺に二〇名の僧侶が配置されたとする文献の記載とも合致し、古代の僧侶の生活を知る重要な資料となった。

讃岐國分寺の事例のように、寺院の周辺域の重要性が意識されるようになるのは、開発などによって、國分寺の周辺域の調査が激増するようになってからで、とりわけ坂東諸國の國分寺は、新たな知見を多く生み出した。千葉県の上総國分寺では、國分寺講堂の北方で「講院」の墨書土器が発見され、國分寺講師のための院地である「講師院」の存在が明らかとなった。⁽³⁾ 同じ上総國分寺では、墨書土器の発見により、綱所、経所、油菜所などの施設が存在したことが推測されている。そして、伽藍の東北方では、基壇建物や掘立柱建物が整然と並び、「東院」の墨書土器も出土した。寺務を扱う施設が「東院」と呼ばれ講師院の東方に位置することが判明する。上総國分寺の例も含め、塔や金堂などによって構成される伽藍地の外側にこれらの諸院を含む寺院地が指定されるようになり、下総、武蔵など坂東諸國の國分寺において同様の検討が進んだ。⁽⁴⁾

寺院の経営に関する諸施設については、寺院の資財帳による研究と

接続することにより、具体的な機能が明らかになる。西大寺の資財帳の内容を、鎌倉時代の「西大寺敷地図」を用いて図上に復原した宮本長次郎の研究により、伽藍地である金堂院や塔院の周囲に、食堂院、政所院、正倉院など、寺院経営に関わる諸施設が配されている状況が復原されている。⁽⁵⁾ 諸國國分寺においても、このような諸施設の解明が進みつつあるといつてよいだろう。

(2) 地方寺院の諸施設の解明

國分寺以外の寺院においても、このような諸院の存在がうかがえる事例が発見されている。大阪府・九頭神麿寺では、寺域の北西において寺域内を区画する築地とその区画内で整然と並ぶ倉庫群が検出された。⁽⁶⁾ この倉庫群の西側の区画には東西棟の大型掘立柱建物があり、倉庫群とは穴門を介して接続することから、倉庫の出納業務にあたる施設であると推測できる。おそらく、これらの施設は、西大寺の資財帳にみえる正倉院に相当するものであつたのだろう。およそ一〇メートル四方の寺域の中で、西北部に「倉院」というべき施設群が設けられていたことになり、西大寺の正倉推定位置ともよく符合する。この九頭神麿寺は、寺の経営施設を考える重要な資料となった寺院であり、本書を編む主体となった古代寺院史研究会の第一回例会開催地である。先に触れた百濟寺跡は、この九頭神麿寺の南東三キロメートルほどに位置し、再整備のための調査においても、寺域の内部を区画する築地、そして修理のための施設が発見され、寺院の諸施設の機能を解明する新たな調査成果を加えている。⁽⁷⁾

残念ながら、各地の寺院では、寺務施設など経営に関する諸施設の

解明は、それほど進んでいない。施設の機能を明らかにすることが難しいものも多く、「雑舎群」というようにまとめられる場合が通例である。菜園など、考古学的な検討すら困難なものもある。しかしながら、断片的であるが、飛鳥の川原寺の修理院、長岡京の川原寺の竈屋、宝菩提院廃寺の湯屋のように、顕著な遺構から機能が推測され、文献の記載との対比が進められている遺構も存在する。⁽⁸⁾調査事例の蓄積とともに、相互比較による機能の推定が必要になっている。

(3) 寺院の法会の解明

寺院の機能として、そこで実施された法会の実態が重要な意義をもつことは論をまたない。しかしながら、文献からのアプローチと比べて、寺院に残された遺物などからの検討は著しく困難であり、わずかに寺院の荘厳に用いた宝幢の遺構などが手がかりである。京都府・雄雄寺跡の調査成果は、出土遺物から法会をはじめとする寺院の活動に迫ることができる重要な発見となった。⁽⁹⁾出土遺物の中でも五〇〇枚を越す燈明皿は、ここでおこなわれた燃燈供養を示しており、ほかに三彩山水陶器は仏具の一部と考えられるほか、法会の際の音楽に用いられた須恵器鼓胴、法会の際に読み上げられたと考えられる和歌木簡など、法会の実像を映し出す資料に恵まれている。法会は、仏堂の前の礼堂を中心におこなわれていたと推測できるが、墨書土器に「悔過」があり、悔過法会がおこなわれていたことは間違いない。このことは、悔過専用の仏堂として成立する東大寺二月堂が、仏堂の前に礼堂を置く双堂形式であることを想起させる。関東地方で九世紀を中心に盛行する「村落寺院」においても双堂形式がしばしば認められるこ

とから、悔過法会の流行を重ねる意見があり、⁽¹⁰⁾礼堂の成立過程を示す神雄寺は、悔過法会の浸透を考えるうえで、重要な位置を占めている。礼堂の成立以前の寺院においても、金堂の前には重要な意味をもっていたらしい。これは、東大寺大仏殿でおこなわれた開眼供養が大仏殿前面を中心におこなわれたことが明瞭な例であるが、前面の空間が庭儀としての法会でもたらされた可能性を導く。同時に、金堂の前面に中門を置く伽藍配置では、中門に礼仏の場所としての役割があったことが推測できる。高麗寺はいわゆる法起寺式伽藍配置の早い例であるが、その中門は、中軸線上ではなく、金堂前面にあることが推定され、中門の役割についての重要な知見となった。⁽¹¹⁾法会の折に中門がどのように用いられたかは、考古学的な実証が難しいが、これからも考えていかなければならない問題である。

最後に、金堂に祀られる仏像が何であるかということも重要な意味をもつ。官大寺のように、本尊そのものが現存する、あるいは資財帳をはじめとする豊富な文字記録が残る寺院では、その仏像にもとづいて寺院の信仰が検討されることが一般的である。しかしながら、各地の寺院では本尊が不明の場合が圧倒的であり、本来の信仰を明らかにするうえで大きな障害となっている。その中で、川原寺西金堂や観世音寺金堂のように、東向きの金堂には阿弥陀仏が安置されていたことが文字資料を援用して推測できる例があり、⁽¹²⁾この問題の糸口となる。そこから、薬師仏と東方浄土、阿弥陀仏と西方浄土といった仏像の方位性が考慮されている可能性を導くことができ、東向きの金堂や西向きの金堂をもつ寺院の本尊を推測することに道を付けることとなった。ただし、圧倒的に多い南面する金堂については、釈迦仏のほかにも候

補は多くあり、決め手を欠くのが現状である。まして、一般的な伽藍配置をとらない多様な古代寺院について、本尊をどのように推測するかは、まだまだ課題が多い。

(4) 寺院復原の課題

以上、寺院の機能を中心に、その課題について触れてきた。その上で、日本における寺院の調査と整備について改めてみると、問題点も少なからずある。一九六〇年代から七〇年代にかけては、各地の国分寺も含め、史跡公園の完成が急がれていたため、十分な調査がおこなわれたわけではないという点がある。先に触れた百済寺跡のように、二一世紀になり、このような点が反省され、再発掘を含め、丁寧な調査が繰り返され、確実な根拠にもとづく復原が心がけられるようになってきている。

このようなことを端的に示すのは、回廊の復原である。これまで、回廊のごく一部をトレンチで把握すると、シンメトリーに復原図を描いて、四面の回廊を圍繞させるようにしている場合が一般的ではないだろうか。しかし、大阪府の高宮廃寺では、近年に史跡整備のための調査がはじめられたが、南面は回廊であるものの、少なくとも東面は築地になっていることが明らかとなり、画一的な復原図の作成に警鐘を鳴らすことになった。⁽¹³⁾

そもそも韓国の百済地域の寺院では、回廊が閉じず、北面回廊がない伽藍配置が陵山里廃寺や王興寺跡で明らかになってきている。日本の事例においても、大阪府の新堂廃寺は、そのような伽藍配置である可能性があり、創建伽藍の南面回廊や東面・西面回廊が存在すること

は確かであるが、講堂に接続する北面回廊があるかどうかは確証がない。再建された伽藍では、金堂の東西に南北棟の建物が設けられ、回廊がそこに取り付く形態になるのは、百済風の伽藍配置であるといえ、同寺が「烏舎寺」と呼ばれていた百済と関係の深い寺院であることを反映していると考えられる。⁽¹⁴⁾この新堂廃寺のような顕著な例は少ないが、百済風の伽藍配置の存在が、日本列島の初期寺院に存在する可能性は大きいと考えられる。したがって、複雑な伽藍配置の存在も念頭に置きながら、北面回廊の有無など、過去の調査事例を再検証することが求められている。

寺院の機能、すなわちソフトウェア的な要素を明らかにすることは、そのハードウェア的な要素についても見直しを迫ることとなる。その両面についての検討を一つ一つの寺院ごとに丁寧におこなうことが重要であることは論をまたない。このような思いから、古代寺院史研究会を開始し、実地の検討と研究会とを重ねてきた。さらに科研費基盤研究A「古代寺院の儀礼・経営に関する分野横断的比較研究」(平成二三年度～二七年度、JSPS科研費JP二三四二〇五〇、代表菱田哲郎)の成果も合わせ、本書に結実している。今後の研究の一助となれば幸いである。

- (1) 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」(聖徳太子奉讃会、一九三六年)。
- (2) 国分寺町教育委員会「特別史跡讚岐国分寺跡保存整備事業報告書」(同委員会、一九九六年)。
- (3) 市原市埋蔵文化財調査センター「上総国分僧寺跡Ⅰ」市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書八集(市原市教育委員会、二〇〇九年)。
- (4) 山路直充「国分寺における寺院地と伽藍地」(古代)一一〇号、二

- 〇〇一年。
- (5) 宮本長二郎「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」(『西大寺と奈良の古寺』日本古寺美術全集六巻、集英社、一九八三年)。
- (6) 枚方市文化財研究調査会『大阪府枚方市 九頭神遺跡Ⅲ』枚方市文化財調査報告六一集(同調査会、二〇一〇年)。
- (7) 枚方市文化財研究調査会・枚方市教育委員会『大阪府枚方市 特別史跡百濟寺跡』枚方市文化財調査報告八〇集(同調査会・同委員会、二〇一五年)。
- (8) 菱田哲郎「古代寺院の寺務施設について」(前掲『大阪府枚方市 九頭神遺跡Ⅲ』)。
- (9) 木津川市教育委員会『神雄寺跡(馬場南遺跡) 発掘調査報告書』(同委員会、二〇一四年)。
- (10) 須田勉「古代村落寺院とその信仰」(国士舘大学考古学会編『古代の信仰と社会』六一書房、二〇〇六年)。
- (11) 菱田哲郎「考古学からみた日本古代の仏教伽藍」(『古代寺院の儀礼・経営に関する分野横断的研究』京都府立大学文化遺産叢書一三集、二〇一七年)。
- (12) 菱田哲郎「古代日本における仏教の普及」(『考古学研究』五二巻三号、二〇〇五年)。
- (13) 寝屋川市教育委員会『国史跡高宮廃寺跡発掘調査報告書』(寝屋川市文化財資料三〇、二〇一八年)。
- (14) 富田林市教育委員会『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳』(富田林市埋蔵文化財調査報告三三五、二〇〇三年)。

(菱田哲郎)

◆古代寺院史研究と文献史学

日本古代寺院の歴史的研究は、戦前に基礎が築かれ、戦後になって大きく進展した。

明治時代、古美術・古社寺保存と不可分のものとして日本美術史・建築史研究が始まったが、寺院やその文化財を論ずる上では、文献史料を厳密に用いるべきことが次第に一般的認識となっていた。戦前の研究の多くは個別寺院の検討であり、その蓄積の上に日本美術史や日本建築史の体系が築かれた。歴史考古学による寺院研究はやや遅れて始まったが、やはり史跡保存と関わりながら発達し、文献の活用は当然の前提とされていた。

一方、文献史学においては、もともと仏教史研究の一環として寺院史研究が行なわれ、やはり検討の中心は個別寺院であった。しかし、やがて寺院そのものの社会的・経済史的研究が開始され、総合的な古代寺院史研究への道が開かれた。

戦後の古代寺院史研究において、特筆すべきは歴史考古学の著しい発展である。調査・研究が全国的・組織的・多角的に進められ、古代寺院に関する知見は質量ともに驚くべき水準に達した。しかしその一方、新しい史料を活用し、これまでにない視角から古代寺院を考えようとする、意欲的な文献的研究も現われてきた。学際的検討をさらに推し進め、新しい古代寺院史研究を構築すべき段階に、今はある。

そこで、文献による古代寺院史研究の成長を跡づけ、さまざまな史料の活用状況を述べるとともに、近年の注目すべき動向についても関説することにした。

あとがき

古代の寺院遺跡について、実際に検討をおこない、分野の垣根をとりはらって議論できる場を設けられないかということ、古代寺院史研究会が発足したのが二〇〇八年四月のことである。二〇名余りの研究者と学生とが枚方市九頭神麿寺やその周辺の遺跡を見学し、第一回の研究会をおこなった。その後、平成二三年度～二七年度科学研究費補助金基盤研究(A)「古代寺院の儀礼・経営に関する分野横断的比較研究」(課題番号二三二四二〇五〇、代表 菱田哲郎)とタイアップしながら、近畿地方を中心とする寺院遺跡の検討を進めてきた。考古学・文献史学・美術史学・建築史学・地理学など、異なる分野の研究者が集い、議論することにより、それぞれが刺激を受け、新しい視点を獲得する機会になってきたと思う。研究会の開催にあたっては、現地の調査機関、調査担当者の方々にたいへんお世話になり、おかげさまで遺跡見学・遺物熟覧・研究報告の三本立てがよく機能している。

考古学では、ややもすれば寺院の伽藍や出土瓦といったハード面に注目しがちであるが、寺院でおこなわれた法会や地域社会の中での位置づけなど、幅広い側面に目を向けるきっかけになったのではないだろうか。文献史学では、検討対象となる寺院そのものに関する史料が少ないことに悩み続けたが、やはり地域史の一環として古代寺院を考える視角や、個別寺院の特質を寺院史一般に拡げていく方法を鍛えることができたように思う。美術史学・建築史学・地理学による知見も興味深く、総合研究の醍醐味を感じることがしばしばであった。

古代寺院史研究会に参加した研究者や科研のメンバーによる論考をまとめて一書をなそうと企画したのは、もう数年前のこととなる。研究会の対象となった寺院遺跡についての最新の紹介もまじえ、古代寺院研究の一視座を提供できるのではないかと考えたからである。早くに原稿を頂戴しながら、発刊までに多くの時を費やしてしまった責任はひとえに編者にある。この場を借りて執筆者各位にお詫び申し上げます。また、本書の出版をお引き受けいただき、スローペースな編者に粘り強くお付き合い下さった思文閣出版の田中峰人氏に感謝の意を表したい。

二〇一九年七月二五日

菱田哲郎・吉川真司

	ふ		美濃山廃寺	112
			三宅寺	300, 303
深草寺		147, 337~339, 341, 342	宮寺	194, 202, 204
福寿寺		18, 217	弥勒寺*	66, 441, 455
葛井寺		218		
布施院		342, 345	む	
扶蘇山寺跡*		448	武蔵国分寺跡	60
船息院		344, 349, 351	武蔵国分尼寺跡	60, 63
船橋廃寺		243, 267	無量寿院	153, 154, 157, 160~162, 164, 165
古町廃寺		385, 391, 393	室生寺	81
芬皇寺*		461		
	へ		や	
			薬師寺	160, 421, 432
別所廃寺		288	矢田寺	221
	ほ		楊津院	344, 349
			山崎院	81, 321, 342, 343, 363
奉恩寺*		490	山崎廃寺	142, 363
法界寺		160	山下寺	299, 302
法界尼寺*		429	山背国分寺	108, 112, 142, 231
法興院		158	山田寺(跡)	63, 65, 244, 282, 370
寶皇寺		337, 338		
法成寺		153~165	よ	
法禪院		81, 339, 342, 346, 362	吉田院	342
法長寺		346		
法通寺跡		279	ら	
奉徳寺*		489, 490	来定寺	337, 338
宝菩提院廃寺		171		
法隆寺		19, 25, 30, 87, 88, 90, 92, 93, 283, 370	り	
法隆寺東院		203	理性院	119, 120, 126, 127, 129
法輪寺		343	龍井里寺跡*	448
法林寺		370	隆福尼院	342
法華寺		29, 43, 48, 194, 219	陵山里寺(跡)*	443, 445, 447, 452~455
法性寺		163	臨江寺跡*	448, 454, 455
法勝寺		156		
発菩提院		81, 342, 345	れ	
	ま		靈廟寺*	463
			靈蓮寺	415
真木尾寺		337~339, 342		
曼荼羅寺		128, 129	ろ	
	み		六波羅蜜寺	160, 163
御麻生園廃寺		78, 80	わ	
三木寺		377	若江寺	137, 283
三谷寺		107	度瀬山房	79
美濃国分寺跡		63	和田廃寺	188
見野廃寺		374		

せ		と	
西北院	155	東安(尼)寺	119~129
清凉寺	141	桐華寺*	491
石木里寺跡*	448	堂ヶ芝廃寺	21, 285
泉橋院	355	東郷廃寺	286
泉橋寺	345, 354	東山里寺跡	447
善源院	344, 349~351, 353, 354, 357	東寺	56, 136, 137, 141, 142, 144, 147, 148, 158
善源寺	350, 353, 354	同聚院	163
禪定寺*	427	道成寺	291
泉福院	342, 345	唐招提寺	225, 226
千福寺*	433	東大寺	18, 19, 43, 50, 195, 217
そ		東南里寺跡*	444, 447
相応寺	148	塔ノ腰廃寺	389, 391, 392
双北里寺跡*	448	東北院	156, 161
た		遠江国分寺跡	65
大安寺	87~92, 160, 179, 183~185, 189, 370	鳥坂寺(跡)	286, 300, 304
大雲経寺*	430	な	
大官大寺	177, 179, 183~186, 243	長岡院	81
大后寺	244	中山観音原廃寺	286
醍醐寺	119~129	夏見廃寺	20, 21, 45
大莊厳寺*	428	難波度院	350, 354, 355, 357
大総持寺*	428	名張廃寺	389, 391, 392
大日寺	356	に	
大福院	350	二光廃寺	20
大鳳寺	137	西郡廃寺	285
当麻寺	221	尼寺廃寺	239
高瀬橋院	344, 349, 350, 355	忍頂寺	81
高田廃寺	241	仁容寺*	468
高宮廃寺(跡)	279, 315	ぬ	
高市大寺	177, 179, 181, 184~186, 189	額田寺	247, 253
多度神宮寺	83	の	
田中廃寺	187, 188	濃於寺	374
檀林寺	144, 147	は	
ち		拝志寺	337~339
智識寺	297, 299, 301	土師観音廃寺	331
長干寺*	423	パムゴル寺跡	447
つ		播磨国分寺	110
辻井廃寺	374	ひ	
て		飛驒国分寺	384, 393
定陵寺*	453	檜尾寺	147, 338, 339, 341, 342, 346, 362
定林寺跡*	449	平等院	153, 159, 160, 162, 163
伝天王寺跡*	449	枚松院	350, 354, 355, 357, 358

き	
紀伊寺	337, 338, 346
喜光寺	81
北白川廃寺	137, 141, 142, 147, 289
北野廃寺	137, 141, 142, 147
紀寺(跡)	56, 187
衣川廃寺	383
木之本廃寺	187
吉備池廃寺	241, 244
暉福寺*	424
旧衙里寺跡*	451
旧校里寺跡*	447
教興寺	300
郷校バツ寺跡*	449
教善寺	415
近長谷寺	77, 80, 81, 370, 378
く	
久修園院	321, 343
九頭神廃寺	142, 247, 249, 250, 257, 269, 274, 289, 311
百濟大寺	104, 177, 181, 186, 189, 244
百濟寺(跡)(河内)	21, 135, 137, 258, 269, 270, 286, 313
百濟寺(摂津)	21, 258
弘福寺	→川原寺
久米田寺	326
黒瀬観音堂	227
軍守里寺跡*	444, 447
け	
県北里寺跡*	449
こ	
甲賀寺(甲可寺)	108, 217, 225
皇基寺*	454
弘孝寺*	471
香山寺	206
香山堂	193, 194, 204, 209
香山薬師寺	210
光寿庵跡	389, 392
上野国分寺	370
高仙寺*	463
興道寺廃寺	399, 400, 403, 404, 406, 407, 409, 411, 412
興福寺	17~19, 23, 24, 26, 43, 44, 55, 59, 160, 211, 221, 225
光明寺	227
光明山寺	231
広隆寺	137, 141, 142, 147, 162, 163, 338, 346
皇龍寺*	459, 470
弘輪寺	370

興輪寺*	458
剛林寺	218
虎岩寺跡*	450, 454, 455
高麗寺	31, 101, 142, 231
崑陽施院	344
小山廃寺	56, 187
金剛寺跡*	449
金光明寺	225
金鍾山房(山寺)	193, 211, 212, 217, 224
金鷲寺	371
さ	
西院邦恒朝臣堂	160, 162
西寺	136, 137, 141, 142, 144, 147, 148
西大寺	17, 43, 55, 58
西隆寺	63
西琳寺	379
佐奈山寺	77, 78, 80, 81
狭屋寺	374
佐野廃寺	375
作蓋部院	350, 351, 354, 355, 357
沢廃寺	385, 391, 393
三仏寺廃寺	384, 393
山房	206
し	
思永仏寺*	453
慈広寺	370
四神田廃寺	79, 80
志筑廃寺	288
四天王寺	59, 92, 94, 243, 281
四天王寺*	432, 465, 470
渋川廃寺	282
志水廃寺	137
下野薬師寺跡	65
寿楽寺廃寺	383, 384, 391, 393
貞観寺	338
湘宮寺*	423
昌楽寺*	422
神護寺	81
神福寺	226
新薬師寺	210, 211
す	
随願寺	109, 110
崇敬寺	241
崇福寺*	471, 475, 489, 490
雀ヶ森廃寺	142
頭陀院	81

寺院名索引

- * 1 本索引は本文中の寺院名について重要度の高いものを検索するために作成した。
したがって網羅的な索引にはなっていない。
- * 2 ○○廃寺・○○廃寺跡、○○寺・○○尼寺などは適宜一方にまとめた。
- * 3 中国・朝鮮半島の寺院名称は、検索の便を考慮して日本語の音読みで並べた。なお、中国・朝鮮半島の寺院には*印を付けた。

あ		太田廃寺	285
		大野寺	81, 330, 365
青木廃寺	241	大宅寺(跡)	126, 129
明科廃寺	383	大宅廃寺	125, 126, 129, 141, 142
芥川廃寺	142, 289	奥山廃寺	121, 122, 187, 243, 244
飛鳥寺	102, 104, 282	乙訓寺	142
安倍寺跡	241	小野寺	120~123, 126, 128, 129
粟倉寺(跡)	258, 269, 274	小野廃寺	123~127, 129
安祥寺	58, 81	粟原寺址	379
い		小治田寺	244
		尾張元興寺	383, 393
雷廃寺	179, 187	か	
斑鳩寺	30, 31, 240	海会寺	417
池田寺	288	外里寺跡*	450
石橋廃寺	389, 392	鶴里寺跡*	449
伊勢大神宮寺	79	勧修寺	119, 121, 125, 126, 129, 341
伊勢寺廃寺	29, 47	嘉祥寺	144, 147, 338
磯部寺	77, 78, 80	佳増里寺跡*	445
伊丹廃寺跡	415	片岡王寺	240
井堤光明寺	231	榎原廃寺	169, 286
井手寺	142	片山廃寺	288
石凝院(寺)(跡)	81, 142, 288	勝川廃寺	288
う		葛木寺	188
		佳塔里寺跡*	445, 454, 455
雲岡石窟*	426	蟹満寺	230, 346
え		神雄寺(跡)	26, 28, 44, 46, 173
		河内国分寺	218
家原寺	300, 304	河内寺廃寺(跡)	279, 317
円教寺	158	川原寺(弘福寺)	20, 26, 43, 87~91, 94, 104, 244
円乗寺	158	河原院	342~344
円融寺	158	感恩寺*	432, 467, 489
延暦寺	81	元興寺	59, 91, 92
お		願興寺	125, 126, 129
		甘山寺*	471
逢鹿瀬廃寺	79, 80	観世音寺	230
王興寺(跡)*	445, 450, 454, 455	がんぜんどう廃寺	361
おうせんどう廃寺	142, 147, 361	観音寺	375
大井院	342~344	観音寺跡*	445, 454, 455
大井寺	147	上町廃寺	385, 392
大里寺	299, 303		

三舟 隆之 (みふね・たかゆき)

1959年生。明治大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程単位修得退学。東京医療保健大学医療保健学部教授。
『日本古代地方寺院の成立』(吉川弘文館, 2003年), 『日本古代の王権と寺院』(名著刊行会, 2013年), 『『日本霊異記』説話の地域史的研究』(法藏館, 2016年)。

三好 清超 (みよし・せいちょう)

1977年生。富山大学大学院人文科学研究科修士課程修了。飛騨市教育委員会事務局主査。
「江馬氏下館跡庭園の発掘調査成果について」(『遺跡学研究』9号, 2012年), 「地方における国分寺の成立に関する一考察——飛騨国分寺跡を事例に——」(『大境』34号, 2015年), 「第10章第1節 古代寺院」(『高山市史 先史時代から古代編』高山市史編纂資料第5号, 2016年)。

松葉 竜司 (まつば・たつし)

1973年生。奈良大学文学部文化財学科卒業。美浜町教育委員会。
「福井県の古代生業」(『研究発表資料集 古代社会の生業をめぐる諸問題』日本考古学協会2011年度栃木大会実行委員会, 2011年), 「若狭湾沿岸地域における土器製塩と塩の流通」(『第16回古代官衙・集落研究会報告書 塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所, 2013年), 「若狭国遠敷郡における律令期の瓦生産」(『館報 平成25年度』福井県立若狭歴史民俗資料館, 2015年)。

中畔 明日香 (なかぐろ・あすか)

1972年生。佛教大学文学部史学科卒業。伊丹市教育委員会事務局生涯学習部博物館館長。

向井 佑介 (むかい・ゆうすけ)

1979年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。京都大学人文科学研究所准教授。
「北魏平城時代の仏教寺院と塑像」(『佛教藝術』316号, 2011年), 「仏塔の中国的変容」(『東方学報』京都第88冊, 2013年), 「墓中の神坐——漢魏晋南北朝の墓室内祭祀——」(『東洋史研究』73巻1号, 2014年)。

清水 昭博 (しみず・あきひろ)

1966年生。大阪市立大学文学部卒業。帝塚山大学文学部教授。
『古代日韓造瓦技術の交流史』(清文堂出版, 2012年), 『古代朝鮮の造瓦と仏教』(帝塚山大学出版会, 2013年), 『東アジアの瓦当文化』(翻訳, 帝塚山大学出版会, 2017年)。

田中 俊明 (たなか・としあき)

1952年生。京都大学大学院文学研究科博士課程認定修了。滋賀県立大学名誉教授。
『高句麗の歴史と遺跡』(共著, 中央公論社, 1995年), 『大加耶連盟の興亡と「任那」』(吉川弘文館, 1992年), 『古代の日本と加耶』(山川出版社, 2009年)。

井上 直樹 (いのうえ・なおき)

1972年生。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。京都府立大学准教授。
「高句麗遺民と新羅——七世紀後半の東アジア情勢——」(『東洋史研究』75巻1号, 2016年), 「古代東アジア世界における高句麗勢力圏——倭勢力圏理解の端緒として——」(吉川真司・倉本一宏編『日本の時空観の形成』思文閣出版, 2017年), 「百済の王号・侯号・太宰号と將軍号——5世紀後半の百済の支配秩序と東アジア——」(『国立歴史民俗博物館研究報告』211 (古代東アジアにおける倭世界の实態), 2018年)。

西田 敏秀（にしだ・としひで）

1956年生。関西大学文学部史学科卒業。公益財団法人枚方市文化財研究調査会事務局次長兼調査係長。

「くずは考——継体天皇擁立の一側面——」（『塚口義信博士古稀記念 日本古代学論叢』塚口義信博士古稀記念会，2016年），「禁野本町遺跡の街区とその形成意義について」（『禁野本町遺跡Ⅳ』公益財団法人枚方市文化財研究調査会，2013年），「北河内における前・中期首長墓の動向と王権」（『北河内の古墳——前・中期古墳を中心に——』財団法人交野市文化財事業団，2009年）。

上杉 和央（うえすぎ・かずひろ）

1975年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。京都府立大学文学部准教授。

『江戸知識人と地図』（京都大学学術出版会，2010年），『日本地図史』（共著，吉川弘文館，2012年），『近世刊行大坂図集』（共編著，創元社，2015年）。

網 伸也（あみ・のぶや）

1963年生。早稲田大学大学院文学研究科（考古学）修了。近畿大学文芸学部文化・歴史学科教授。

『平安京造営と古代律令国家』（塙書房，2011年），「造瓦体制の変革期としての仁明朝」（古代学協会編『仁明朝史の研究』思文閣出版，2011年），「考古学からみた百済王氏の動向——交野移貫と山背遷都——」（館野和己編『日本古代のみやこを探る』勉誠出版，2015年）。

安村 俊史（やすむら・しゅんじ）

1960年生。大阪市立大学文学部卒業。柏原市立歴史資料館館長。

『群集墳と終末期古墳の研究』（清文堂出版，2008年），「大王権力の卓越」「古墳の終末」（岸本直文編『史跡で読む日本の歴史2 古墳の時代』吉川弘文館，2010年），『河内六寺の輝き』（柏原市立歴史資料館，2007年）。

大竹 弘之（おおたけ・ひろゆき）

1956年生。同志社大学大学院文学研究科博士前期課程修了。枚方市教育委員会事務局社会教育部文化財課課長代理（2017年3月定年退職）。

『新編 郷土枚方の歴史』（共著，枚方市教育委員会，2014年），「韓国全羅南道の円筒形土器——いわゆる埴輪形土製品をめぐる——」（朝鮮学会編『前方後円墳と古代日朝関係』同成社，2002年），「河内百済寺跡の発掘調査」（『百済學報』8号，2012年）。

丸山 香代（まるやま・かよ）

1984年生。近畿大学大学院文芸学研究科国際文化専攻修士課程修了。寝屋川市教育委員会。

仲林 篤史（なかばやし・あつし）

1982年生。京都府立大学文学部史学科卒業。東大阪市教育委員会事務局社会教育部文化財課。

近藤 康司（こんどう・やすし）

1965年生。関西大学文学部史学地理学科卒業。堺市役所文化財課学芸員。

『行基と知識集団の考古学』（清文堂出版，2014年），「和泉における古代寺院の成立と展開」（撰河泉古代寺院研究会編『撰河泉古代寺院論纂』第1集，1997年，撰河泉文庫），「大宰府の文字瓦」（須田勉編『日本古代考古学論集』同成社，2016年）。

吉野 秋二（よしの・しゅうじ）

1967年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。京都産業大学文化学部教授。

『日本古代社会編成の研究』（塙書房，2010年），「神泉苑の誕生」（『史林』88巻6号，2005年），「日本古代の国制と戦争」（『日本史研究』654号，2017年）。

西本 昌弘（にしもと・まさひろ）

1955年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。関西大学文学部教授。

『日本古代の王宮と儀礼』（塙書房，2008年），『日本史リブレット人 桓武天皇』（山川出版社，2013年），『飛鳥・藤原と古代王権』（同成社，2014年）。

根立 研介（ねだち・けんすけ）

1956年生。京都大学大学院文学研究科修士課程中退。京都大学大学院文学研究科教授。
『日本中世の仏師と社会』（塙書房、2006年）、『運慶』（ミネルヴァ書房、2009年）、『ほとけを造った人びと』（吉川弘文館、2013年）。

堀 大輔（ほり・だいすけ）

1971年生。京都府立大学大学院文学研究科修士課程修了。京都市文化財保護課記念物係長。
「山背・近江・丹後の藤原宮式・本薬師寺式軒瓦」（『古代瓦研究Ⅴ——重弁蓮華文軒丸瓦の展開・藤原宮式軒瓦の展開——』奈良文化財研究所、2010年）、『飛鳥白鳳の甍——京都市の古代寺院——』京都市文化財ブックス第24集（京都市文化財保護課、2010年）、『京都府の歴史散歩』（共著、山川出版社、2011年）。

梅本 康広（うめもと・やすひろ）

1966年生。龍谷大学文学部史学科卒業。公益財団法人向日市埋蔵文化財センター常務理事兼事務局長。
「長岡京」（西山良平・鈴木久男編『古代の都3 恒久の都平安京』吉川弘文館、2010年）、「山城・摂津」（一瀬和夫ほか編『古墳時代の考古学』2、同成社、2012年）、「古代・中世寺院の浴室構造とその変遷」（赤松徹真編『日本仏教の受容と変容』永田文昌堂、2013年）。

大坪 州一郎（おおつば・しゅういちろう）

1982年生。京都府立大学大学院文学研究科博士前期課程修了。木津川市教育委員会文化財保護課主任。

小澤 毅（おざわ・つよし）

1958年生。広島大学大学院文学研究科博士課程後期考古学専攻中途退学。三重大学人文学部教授。
『日本古代宮都構造の研究』（青木書店、2003年）、『吉備池廃寺発掘調査報告』（編著、奈良文化財研究所、2003年）、『古代宮都と関連遺跡の研究』（吉川弘文館、2018年）。

平松 良順（ひらまつ・りょうじゅん）

1965年生。京都府立大学大学院文学研究科博士後期課程修了。京都府立大学非常勤講師。妙興寺山内來薫院住職。
「八世紀の燃灯供養と灯明器」（大和を歩く会編『シリーズ歩く大和Ⅰ 古代中世史の探究』法蔵館、2007年）、「東大寺千手堂跡の古瓦」（『南部佛教』92号、2008年）、「尾張妙興寺考——その考古学的検討——」（『橿原考古学研究所論集』第15、八木書店、2008年）。

藤岡 穰（ふじおか・ゆたか）

1962年生。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。大阪大学大学院文学研究科教授。
『日韓金銅半跏思惟像——科学的調査に基づく研究報告——』（監修・共著、韓國國立中央博物館、2017年）、「野中寺弥勒菩薩像について——蛍光X線分析調査を踏まえて——」（『MUSEUM』649、2014年）、「中国南朝造像とその伝播」（『美術資料』89、2016年）。

山下 隆次（やました・りゅうじ）

1961年生。佛教大学大学文学部史学科卒業。香芝市教育委員会主幹。
『尼寺廃寺Ⅰ』（香芝市教育委員会、2003年）、『尼寺廃寺Ⅱ』（香芝市教育委員会、2016年）。

丹羽 恵二（にわ・けいじ）

1977年生。京都府立大学大学院文学研究科博士前期課程修了。桜井市教育委員会文化財課主査。
『桜井の横穴式石室を訪ねて』（編集及び共著、桜井市立埋蔵文化財センター、2010年）、『阿倍氏——桜井の古代氏族——』桜井市立埋蔵文化財センター展示解説書第39冊（共著、財団法人桜井市文化財協会、2012年）。

岩本 正二（いわもと・しょうじ）

1950年生。岡山大学法文学部専攻科（考古学）修了。
「明日香村檜隈寺の発掘調査」（『佛教藝術』136号、毎日新聞社、1981年）、『草戸千軒』（吉備人出版、2000年）、『備讃瀬戸の土器製塩』（共著、吉備人出版、2007年）。

執筆者紹介（掲載順）

菱田 哲郎（ひしだ・てつお）

1960年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。京都府立大学文学部教授（副学長）。『須恵器の系譜』（歴史発掘10、講談社、1996年）、『古代日本——国家形成の考古学——』（京都大学学術出版会、2007年）、『はじめて学ぶ考古学』（共著、有斐閣、2011年）、『古墳時代の社会と豪族』（大津透ほか編『岩波講座日本歴史』第1巻、岩波書店、2013年）。

吉川 真司（よしかわ・しんじ）

1960年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。京都大学大学院文学研究科教授。『律令官僚制の研究』（塙書房、1998年）、『天皇の歴史02 聖武天皇仏都平城京』（講談社、2011年）、『シリーズ日本古代史③ 飛鳥の都』（岩波書店、2011年）。

大脇 潔（おおわき・きよし）

1947年生。早稲田大学第一文学部史学科国史専修卒業。フリーランス アルケオロジスト。「世界の瓦——研究の一里塚——」（『古代』129・130合併号、早稲田大学考古学会、2012年）、「塔の考古学——心柱を立てる技——」（須田勉編『日本古代考古学論集』同成社、2016年）、「7世紀の瓦生産——花組・星組から荒坂組まで——」（『古代』141号、特集 古代都城造営と瓦生産、早稲田大学考古学会、2018年）。

高橋 照彦（たかはし・てるひこ）

1966年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程中途退学。大阪大学大学院文学研究科教授。「正倉院伝来の鼓をめぐる基礎的検討」（柴原永遠男ほか編『東大寺の新研究』1、法藏館、2016年）、「正倉院三彩小塔考——国分寺草創期の東大寺前身寺院——」（『待兼山考古学論集』Ⅲ、大阪大学考古学友の会、2018年）、「東北地方北部出土の緑釉陶器とその歴史的背景」（六ヶ所村「尾駈の牧」歴史研究会編『尾駈の駒・牧の背景を探る』六一書房、2018年）。

高 正龍（こ・じゅんりょう）

1960年生。韓国釜山大学校人文大学史学科卒業。立命館大学文学部教授。「新羅頸部施文瓦の製作技法——統一新羅瓦の編年にむけて——」（『MUSEUM』596号、2005年）、「蔚山慶尚左兵營城と熊本佐敷城の同範瓦——豊臣秀吉の朝鮮侵略と「朝鮮瓦」の伝播（2）——」（『東アジア瓦研究』4号、2015年）。

堀 裕（ほり・ゆたか）

1969年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。東北大学大学院文学研究科教授。「平安新仏教と東アジア」（大津透ほか編『岩波講座日本歴史』第4巻、岩波書店、2015年）、「天皇と日宋の仏教文化」（GBS実行委員会『ザ・グレートブッダ・シンポジウム論集 第十五号 日宋交流期の東大寺——齋然上人一千年大遠忌にちなんで——』法藏館、2017年）、「盧舍那如来と法王道鏡——仏教からみた統治権の正当性——」（柴原永遠男ほか編『東大寺の新研究3 東大寺の思想と文化』法藏館、2018年）。

黒羽 亮太（くろは・りょうた）

1987年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。京都大学文学部非常勤講師。「救急料と九世紀賑給財源の再検討」（『日本史研究』645号、2016年）、「平安時代の寺院と陵墓の関係史」（『日本史研究』676号、2018年）、「平安貴族社会の役と文書の変容」（『日本史研究』679号、2019年）。

古閑 正浩（こが・まさひろ）

1968年生。佛光大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程前期修了。（京都府乙訓郡）大山崎町教育委員会生涯学習課主幹。「平安京南郊の交通網と路辺」（『日本史研究』551号、2008年）、「長岡京の造瓦組織と造営過程」（『考古学雑誌』95巻2号、2011年）、「平安京初期の造瓦組織」（『考古学雑誌』99巻1号、2017年）。

こだいじいんし けんきゅう
古代寺院史の研究

2019(令和元)年7月31日発行

編者
菱田哲郎・吉川真司

発行者
田中 大

発行所
株式会社 思文閣出版
〒605-0089 京都市東山区元町355 電話 075(533)6860(代)

装幀 小林 元
印刷製本 亜細亜印刷株式会社

© T. Hishida & S. Yoshikawa, 2019 ISBN978-4-7842-1968-1 C3021